

共に創る図書館

～館長対談シリーズ⑥～

平井総合科学部長との対談

吉本 本日は総合科学部長の平井先生から、お話をお伺いします。よろしくお願いします。

平井先生はよく図書館を利用していただいておりますが、図書館の印象はいかがでしょうか。

平井 徳島大学へ赴任してから図書館は結構使わせていただいております。リニューアルしてから本当にきれいになり、学生は良い環境で勉強できると思います。



吉本 平井先生のご出身等についてお聞かせいただいてもよろしいでしょうか。また、徳島大学へ来られた頃の印象はいかがだったでしょうか。

平井 北海道の帯広出身ですが、父親の仕事の都合で道内各地を引っ越していました。もともと地理が好きだったので、地理学科がある立命館大学及び大学院へ進学し、その後徳島大学教養部の講師として採用されました。最初に徳島大学へ来た時は、非常に学生が真面目で、授業の出席率も高いという印象がありました。その後、平成5年に教養部と総合科学部が統合し、総合科学部の所属になりました。

総合科学部の遷り変わり

吉本 総合科学部の流れについてお話いただけますか。

平井 明治7年に徳島藩の藩校長久館の流れを汲んだ徳島師範期成学校が設立され、その後徳島師範学校となり、戦後の学制改革により昭和24年に徳島大学が設立された際に、学芸学部として再発足し、昭和41年に教育学部に改称しました。昭和61年の鳴門教育大学設置により教育学部は廃止となり、徳島大学に総合科学部を設置しました。私が徳島大学へ赴任したのは昭和57年ですので、総合科学部ができる4年ほど前でした。かつて、徳島県内の小中学校・高校の先生方の多くは徳島大学教育学部のご出身でしたので、同窓会組織の清水会は大きな組織です。

伊能図との関わり

吉本 歴史地理学を研究分野とされたきっかけや、現在の研究テーマである伊能図研究に関してのきっかけはどのようなものでしょうか。

平井 私の出身が北海道ということもありますが、徳島大学に赴任当初は北海道移民研究を行っていました。明治中頃から昭和初めにかけて北海道へ移住した人は、西日本の中では徳島県出身者が延べ5万人とダントツに多かったということや、また、明治3年(1870)の稲田騒動後に稲田家家臣が北海道へ移住したこと等がきっかけでした。しかし、総合科学部に移った際に授業の関係もあり、徳島大学附属図書館が所蔵している絵図を教材として調査に取り組むことになりました。

平井 その中で絵図を一枚一枚広げて採寸等の基礎的な調査を2年くらい行いましたが、それをまとめた Excel 表が、現在附属図書館のホームページに掲載している貴重資料の古地図の情報です。平成8年には図書館側から貴重資料のデジタル化事業を進めたいという話があり、お手伝いすることになりました。今から20年前の当時、最初に作成した画像データは、分割で640メガバイトのCD1枚に入るものとなりました。伊能図は、米粒一つの大きさに3文字くらい書かれていて、高い解像度を必要としましたが、実際にCD1枚を開いてみると字が読めないものもありました。そこで次の年には2ギガバイトの画像データを作成し、その後DVDができ、高画質のものを保存することが可能となりました。しかし、当時はハードディスクも対応が遅かったので、Photoshopのソフトで画像を開くのに30秒くらいかかるような状況でした。その後、MADOという高精細画像を開くためのブラウジングソフトが開発されたことにより、画像をスムーズに閲覧できるようになりました。今のようにネット上のホームページで高精細画像がスムーズに表示できるようになったのは平成20年頃からです。それまではホームページ上では技術的に簡易画像しか表示できなかったため、高精細画像は図書館内に設置した端末パソコンで閲覧していただいていたと思います。今は色々なソフトができて非常に便利な環境になりましたね。



総合科学部長 平井松午

吉本 学生時代にはどのような研究をされていたでしょうか。また、学生時代あるいは教員になられてからの図書館の思い出はいかがでしょうか。

平井 学生時代は村の成り立ちに関するフィールドワークを行っていました。また、関西の大学でしたので京都大学や大阪経済大学などへ行って文献を集めたり、古書屋巡りをしたりしていましたが、当時はコピーも1枚50円と高く、文献を集めるのも結構大変でした。

総合科学部は 学生にとって非常に勉強しやすい良い環境です

吉本 総合科学部における学習環境や研究環境、地域連携や社会貢献の状況について教えてください。

平井 総合科学部は最初に3号館、続いて1号館・2号館が改修され、教室や研究室は非常にきれいになりました。また、改修に併せて1号館には図書を収納できるスペースや、その横には自習スペースもでき、それぞれの専門の勉強や資格試験、採用試験等の勉強ができます。3号館の2階・3階にも廊下を利用した学生の自習スペースを設けていますので、学生は非常に勉強しやすい環境になっています。

また、総合科学部はこれまで文系分野と理系分野の両方のコースがありましたが、平成28年度からの学部改組によって、理科教育や数学教育を担う理系分野は理工学部・生物資源産業学部へ移りましたので、総合科学部は社会総合科学の1学科4コースの文系の学部となりました。文系の研究では多くの文献を必要としますが、必要な研究資料が大学図書館に揃っていないという場合もあります。最近ではデータベース等も充実してきましたので、以前より良い環境になっていると思います。



附属図書館長 吉本 勝彦

研究データのオープン化

吉本 社会科学系の電子ジャーナルや文献データベースの充実も必要ですね。

平井 私の研究分野に関しては、昔は徳島大学に統計書等が揃っていない状況でした。以前には文科省の大型コレクションという予算があり、そちらへ申請したところ採択され、非常にありがたかったことがあります。その時の統計関係のマイクロフィルム資料は現在も図書館に保管されています。また最近では東京大学や国文学

研究資料館などにおいて、所蔵資料の画像データを作って公開を進めていますが、徳島大学ではそれよりも前から古地図等の画像を公開しており、おそらくこのような先例を作ったのは徳島大学であると考えています。資料のインターネット公開によって、一般の方々も見ることができるようになりましたし、研究者間においても研究資料を幅広く得ることができ、非常に便利になっています。

吉本 国内では内閣府や文科省を中心に、論文などの研究成果や研究データを研究者だけでなく民間企業や一般市民とも共有する「オープンサイエンス」の取組が推進されている現状ですが、研究データそのものを公開することによって、色々なイノベーションにつながることを期待されます。

平井 研究者にとっても、こういうデータがあるんだということが分かって非常に面白いと思いますし、そういう面でも研究データのオープン化は今後も進めるべきだと考えます。

地域連携・社会貢献

吉本 地域連携や社会貢献に関して、総合科学部では色々な取り組みをされているようですし、海外との交流も多いですね。

平井 毎年実施しているアンケートによると、海外で学ぶことを希望する学生はこれまで10%程度でしたが、今回の学部改組によって国際教養コースもできましたので25%に上昇しました。今後図書館にも、グローバル関係や語学教育に関する図書の実を、ぜひお願いしたいと思います。

地域連携に関しては、附属図書館副館長の依岡先生を中心に県立文学書道館などとの連携を行っていますし、私自身も阿波学会の関係もあって徳島県立図書館協議会等において連携を行っています。



吉本 図書館でも徳島市立図書館との連携は行っていますが、県立図書館との連携はこれから進めていくところです。

学習支援… 図書館へ期待すること

吉本 図書館では2年半ほど前から学習支援に力を入れる方向を取っていますが、学習支援の面において図書館に期待することや、あるいは一緒にできることはございますか。

平井 総合科学部の教員は、図書館と色々な面で協力させていただいていますし、オリエンテーション等においては、図書館の方から利用の仕方や文献の探し方などについてガイダンスに来ていただいています。今年度から総合科学部では1学科4コースに改編し、国際教養コースもできましたので、そういう面で今後も図書館にも色々な支援していただきたいと考えています。また、総合科学部では古い文献も必要としますので、将来、図書館が増築されて資料を保存できるスペースが広がることを願っています。

その他、鳥取県立図書館では保健や介護のような医療関係について、一般の方向けに情報として提供されているようですので、図書館が「知」の提供だけでなく「情報」の提供も行っていただけると良いと思います。大学図書館であっても徳島県における情報の提供者として、図書館へ行けば何か分かる、というような在り方も可能かと思っています。

吉本 鳥取県立図書館では前県知事の「図書館は民主主義の『知の砦』だ」という考えを大切にされ、資料の充実に努めており資料費は全国一位と伺っています。鳥取県内では大学図書館と県立図書館との連携も非常に活発に行われていますので、徳島県内図書館と徳島大学図書館の連携でも参考にしたいと考えています。

アクティブラーニングの取り組み

吉本 歯学部と総合科学部は、全学共通教育センター時代から「読書レポート」を1年生に課しています。また、最近では学生の書く力が弱いということが問題となっており、ライティングセンターを設置している大学も増えてきました。このような読書指導とかライティングという点においてどのようにお考えでしょうか。

平井 総合科学部でも改組により今年から新しく「総合科学入門講座」という授業を開始しましたが、その中で本の読み方やレポートの書き方について、図書館にも協力いただけて行っています。これは170名という大人数の授業ですが、後期では「問題発見ゼミナール」という個別ゼミに移っていきますので、その中で具体的にそれぞれの取り組みを行うようになります。また、書く力だけでなく読む力というのも大切ですが、大学生基礎力調査によると月に1冊本を読む学生が極めて少ない状態です。

吉本 高校時代は受験勉強で精一杯ですので、大学生になった時にまた読み始める何かきっかけ作りになればということもあって、「読書レポート」が始まりました。スマホだけでなく新聞等も読んでほしいと思います。簡潔、明解で論理的な文章の作成法について、個別指導可能なライティングセンターを設置できたら良いと考えています。

最近話題になっているアクティブラーニングは、小中高でも今後取り入れることになりましたが、総合科学部での取り組みはいかがでしょうか。

平井 先日他大学との協議会の中でも、テーマの一つにアクティブラーニングのことがありました。アクティブラーニングだけですと学生は自分が何をやっていいかわからないということが起きますし、ある程度は座学の部分が必要であり、それを踏まえた上でのアクティブラーニングを取り入れるということが大切ではないかと思えます。総合科学部では2年生の前期で「総合科学実践講義」で地域創生やアート、健康づくりなどのテーマで講義を行い、後期にはそれに対応する形で「総合科学実践プロジェクト」という地域と連携した実践型の授業を行う計画です。この実践型授業においてアクティブラーニングを実施することになりますので、座学とアクティブラーニングをバランス良く取り入れることができると思えます。3年生になりますとそれぞれ実習がありますので、自然と自分自身で考えて取り組むことになります。

吉本 図書館としては情報リテラシー教育という部分も含めて協力したいと思います。

平井 これから授業の中身を検討する中で、図書をしっかり読んで課題を見つけ、それを自分でアクティブラーニングへと展開していくことになりますので、その際に図書館にもぜひご協力をお願いしたいと思います。

吉本 最近は電子ジャーナルの普及により、図書館へ来られる教員が非常に少なくなりました。教員が図書館へ来て学生に話しかけて交流できるような、教員を図書館へ引き寄せる仕掛けのようなものは何かございますか。

平井 学術講演会のようなものを、学部でも図書館でもいいので開催できると良いと思います。

吉本 千葉大学附属図書館では、道路から直接入れる所にプレゼンテーションスペースを設けています。そこでは学長の話や、教員による研究の楽しさの話、留学経験のある教職員の現地での生活や研究活動の話であったりと、様々なトピックでの講演が毎週火・金曜日の昼休み時間に行われており、非常に良いと感じました。

平井 大学にはたくさん先生方がいらっしゃいますし、先生方も喜んで講演等を引き受けてくださると思えます。授業ですとどうしても肩肘張ってしましますが、気軽にできるものがないですね。

吉本 ぜひ検討させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

